

大阪府史談

鈴木直三郎
橋本光秋 編輯

全

特31

260

025240-000-7

特31-260

大阪府史談

鈴木 直三郎 / 著

M27

ADC-2649



鈴木直三郎
橋本光秋 編輯

大坂府史談

教育書房發行

例言

一此書の現行文部省令小學教則大綱に從ひ、郷土史談の教科用書として、編纂せるものなり。

一時間の思想の歴史の骨髄を、此書往古より時代の順序によりて、事實を列挙し、かの徒ら名所舊蹟を羅列することを避けたり、然るにも郷土の如き狭き範圍内に於ては、其變遷の序次を盡す能はざるものあり、是編者等の深く教師の注意を望む所なり。

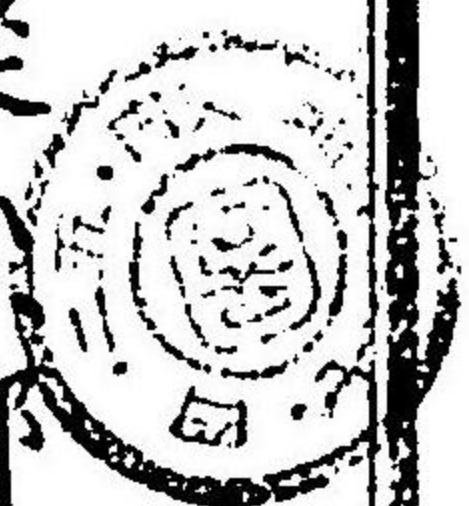
一事實の口碑を存して正史不見えど、或は其記



例言

一此書ハ現行文部省令小學教則大綱ニ從ヒ郷土史談の教科用書として、編纂せるものなり。時間の思想ハ、歴史の骨髄あれど、此書往古より時の順序よりて、事實を列擧し、かの徒ら名所舊蹟を羅列することとを避けたり、然ると郷土の如き狭き範圍内ニ於てハ、其變遷の序次を盡さ能はざるものあり、是編者等の深く教師の注意を望む所なり、

一事實の口碑不存して正史不見えど、或ハ其記



憶の價値あきものゝ、悉く省略せり、又源顯家の如き、其人記述まづきを要せれとも、楠氏に
より、其時代を示したるが如きの類あり、

一 結論ハ府下發達の順序を示すにあれば、纖弱なる兒童の腦力の、稍困難なるべしと雖、是最必要なる事項なれば、教師ハ深く注意して了解せしめんを要し、

一 此書編纂ニ關してハ、有名なる教育家諸君の補助を受けしこと、尠あらざるは、是編者等の深く

謝する所あり、

大阪府史談

目次

- 一 緒言
- 二 難波
- 三 白鳥陵
- 四 住吉神社
- 五 應神天皇陵
- 六 高津神社
- 七 天王寺
- 八 長柄豐崎宮

- 九 天満宮
- 十 通法寺
- 十一 逆櫓松
- 十二 金剛山
- 十三 櫻井驛
- 十四 四條畷
- 十五 観心寺
- 十六 石山本願寺
- 十七 大阪城の一
- 十八 大阪城の二

- 十九 瑞軒山
- 二十 天野屋利兵衛
- 二十一 契冲阿闍梨
- 二十二 懐徳書院附含翠堂
- 二十三 大鹽平八郎
- 二十四 天保山の砲臺
- 二十五 大阪府
- 二十六 結論
- 一 一般の沿革
- 二 農業の沿革

- 三 商業の沿革
- 四 工業の沿革

大阪府史談

鈴木直三郎
橋本光秋 合著

一 緒言

諸子、今より日本國の歴史を學ばざるべからざる、その國の歴史と稱するは、國の開闢より今日に至るまでに、起りたる種々の出來事を書き記したるものあり、小にして之を譬ふれば、一家の記録、一身の履歷書の如し、故に歴史を學ぶは、實に愉快なる業なり、而して國民としてハ、必だ其



國の歴史を知らざるべからざるものなれば、歴史の又必要なる學問なり、諸子の定めて速に之を學ばんことを欲するふるべし、然れども日本國の歴史を學ぶ前に、諸子の先づ諸子の郷土たる大阪府の史談を知らざるべからば、大阪府の實に歴史に富みたる國あり、大阪府の史談を知らざれば、殆んど日本國の歴史を知ることを得べし、果して然らば、この史談の諸子を樂まむること幾何ぞ是より諸子に之を談ぶべし、

二 難波

今の大阪を難波といつど、古の攝津の國を難波といひしなり、難波の名は今より二千五百五十年ばかりのむかし、神武天皇東征の時起りしなり、今此東征の次第を話すべし、初め 神武天皇は、日向の國とて遷ふる西の國におはし、その近邊を治め給へり、其他の地方には、處々に酋長ありて、互に土地を争ひて、其部民を虐げ、戦争たゆることなかりき、天皇

神武天皇



民の王化ふ露のさると憫み給ひ、且て國々を統一せんとたぼしめして、日向の國を出で立ち、海路去の地ふつき給ひしとき、海(大阪灣)の潮速かりし故に、浪速(なみはや)の國と名け給ひしを、後轉じて難波と唱へしあり、天皇難波より大和

に入らんとたぼしめして、河内の生駒山ふ至り給ひしに、大和の長髓彦と云ひける酋長、天皇の師を此山の孔舎衛坂(今の暗峠の邊)ふふせぎければ、天皇師をかつして、和泉を経て紀伊ふいたり、更に大和ふ入りまゝして、長髓彦其他の酋長を誅し給ひて、遂に皇位ふ即き給へり、是に於て國々の酋長等も盡く服従して、始めて統一し、民皆王化に浴するに至れり、されむ天皇を第一代の天皇と申し奉り、其御即位の日ハ、紀元節と稱して、わが國の年代を紀する始めと定め

られたり、三大節の一となりて、臣民の祝し奉る二月十一日の即ち是あり、

三 白鳥陵

河内古市郡古市村ふ有名なる白鳥の陵あり、白鳥陵は日本武尊の山陵なり、尊は神武天皇より十二代まで當り給ふ、景行天皇の御子にして、最も仰ぐべき御方なり、

神武天皇全國を統一し給ひ、後は、わが大坂府近傍の國々は、王化ふ浴して大平あり、かども、

九州東國は、皇都を去ること遠ければ、皇威未だ普く及ばず、九州ふは熊襲として猛き蠻族住み荒び、東國ふは蝦夷として強き土人はびこり居て、屢民の患をなせり、景行天皇日本武尊に熊襲の征討を命じ給へり、此時尊の御年僅に十六なり、しが身のたけ一丈ふ餘り、力万人にもぐれ給ひしふは、單身熊襲の家に入り、その酋長を刺殺して、難なく九州を平け給へり、後また東國の蝦夷をも征し給ひしが、皆其威に恐れて、東國も平定せり、かく尊は勇武にましまして、功勞高かりし

も、御年三十より薨ト給へり、天皇深く悼み給ひて、三陵を造りて、厚くその功を酬以給へり、白鳥の陵は其一なり、これより伊勢の陵と大和の陵とを併せて、白鳥の三陵といふなり。

四 住吉神社

難波の南、住吉に遊ばし、風光明暉なる勝地の中、社殿魏々たる官幣大社住吉神社を見るまらん、此神社は古攝津の一の宮といひて、遠國の士民も、今も其威靈を仰ぎ奉れり、此神社の創立は

今より千七百年ばかり昔、神功皇后三韓を征伐し給ひし時、住吉の明神、皇師を助け給ひしにより、今の地にお社殿を建て祀り給ひあり、神功皇后とは日本武尊の御子なる、仲哀天皇の御后にましませり、天皇の御代、熊襲叛きければ、天皇、皇后と共に、躬ら熊襲を征し給ひしに、天皇は軍中にお崩ト給へり、皇后女性におはしましたれども、智勇勝れ給ひしかば、天皇の喪を秘し、男装して三軍を指揮し給へり、時に朝鮮は三韓と云ひて、熊襲の地とは近くして



金銀寶物に富みたり、皇后即別將を遣りて熊襲を伐たしめ、みづから舟師をひきぬ、三韓に渡り給ひしに、三韓の國王等、風を望んで降りたりき、皇后乃ち此國を長くわが國の屬國となし、年々八十艘の朝貢を約し、振旅して歸り給ひき、是に

於て熊襲も其威に恐れ、其の後永く九州靜寧となれり、

此項我國の武勇は遙に三韓其他の外國等よりも勝りしかども、文化は未だ大に進歩せざりき、之に反して、三韓は已に開けて、絹布金銀等の財寶に富み、農業工業の術進歩したりき、故に其朝貢により、わが國の財寶を増し、のみならず、又大にわが國の技術をも進歩せしめたり、

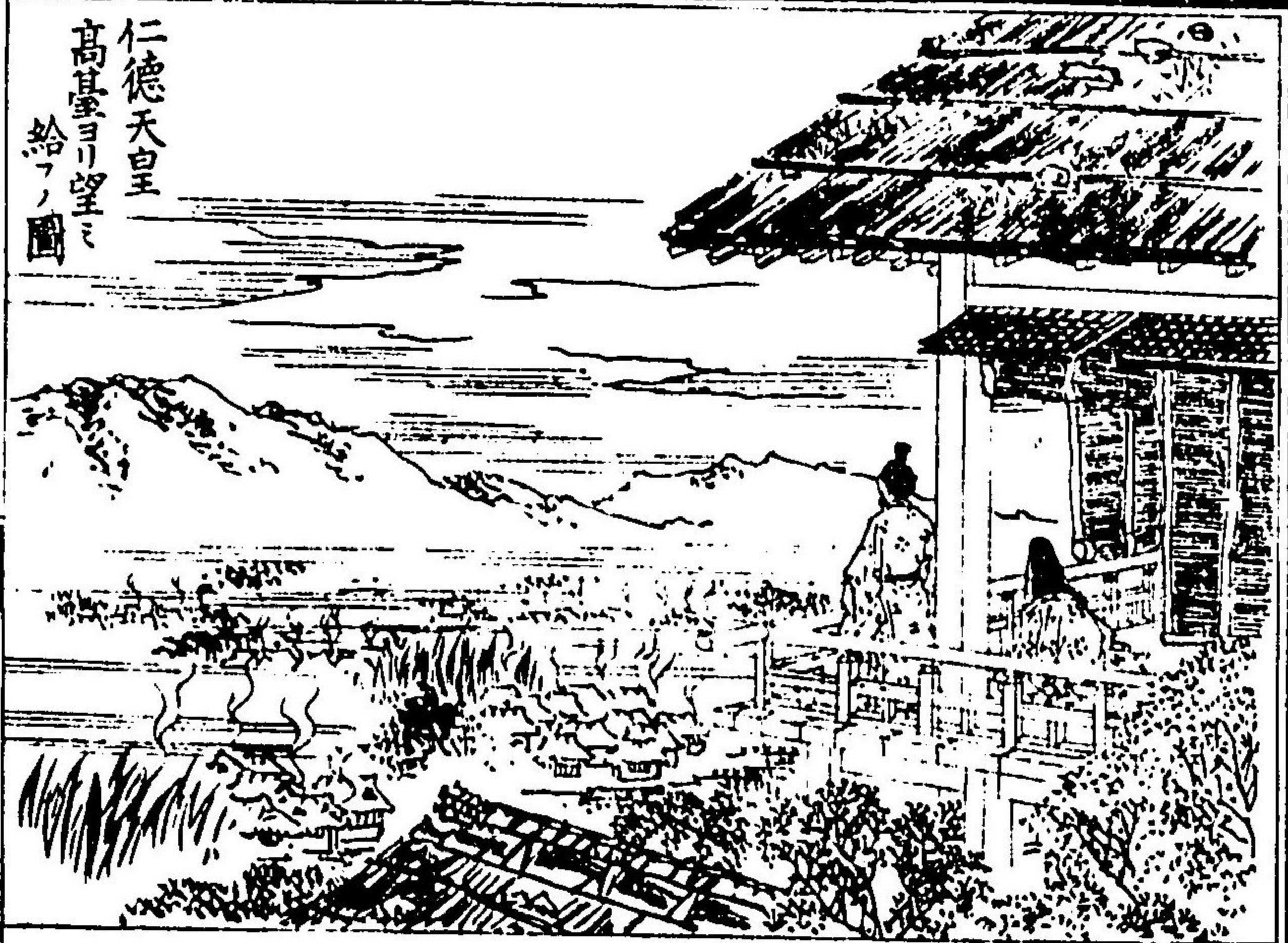
五 應神天皇陵

白鳥の陵の近傍に、應神天皇の山陵あり、天皇は八幡宮として到る處祀り奉り、御名最も高き天皇あり、御父は仲哀天皇にして、御母は神功皇后あり、天皇の御代に三韓より論語千字文を奉り、又博士王仁來りて朝廷に仕へ、文字をわが國人に教へたり、是より彼國の文字、弘くわが國に行はれて、遂にわが國のものとなれり、わが國の古は、文字なくして、話の外に己の心を人々に通ずべき道なかりければ、古の事又は遠き所の事は、口々に相傳へて、人々の記憶に任せたり。

りしかば、多少の謬もあるべく、又忘るゝ事も多かるべくして、不便なる事も少あらざりしならん、されど、天皇も大に喜び給ひ、御子稚郎子に王仁を師として學ばしめ給へり、此時傳はりたる文字は、今の漢字よみて、片假名平假名は、其後數百年を経て、わが國よみて作りたるものなり、又博士王仁は、元三韓の人なりしかども、我國に來りし後は、我國の人となりて朝廷に仕へ奉れり、其墓は今尚ほ河内の交野郡藤坂村にあり。

六 高津神社

大坂の高津又高津神社とて名高き神社あり此高津神社は 仁徳天皇を祀り奉れる處なり、天皇は 應神天皇の御子にして、稚郎子の御兄に坐らせり、初め 應神天皇の稚郎子を皇太子と給ひしかども、 應神天皇崩御の後、稚郎子位を 天皇にさけ、 天皇も亦固辭して位又即き給はず、三年の後、稚郎子遂に自殺し給ひき、天皇乃ち己むを得ざりて位に即き給ひ、難波の地又都し給へり、難波は今の大阪にして、皇居ハ



仁徳天皇
高津神社望
給ふ圖

今の桃山あたりのをらん、天皇性仁慈ふましましければ、即位の後、民の炊烟の稀少あるを見て、深く憫をたれ給ひ、直に三年の租を免したまへり、うづて大宮は荒れはてて、風雨に堪へがたきも憂へ給はず、三年の後、炊煙の盛にたつを見て、朕

は富みたりと宣ひて、大又悦ばせ給へり、誠又其民を愛せらるゝ御心は、親の子を愛する心よりも深く、古今に匹なき御仁心なり、されば民の天皇を慕ひ奉ること、も親の如く、三年の後、租を收め、材木土砂を運びて、大宮を營ふ奉りたりき、よの頃、淀川は土砂堆積して、水流甚悪く、風雨に遇へば、河水漲溢して、田圃民舎を浸したり、天皇河をさらへ、堤防を築かゝめて、其患を除き給ひ、又溝渠をもほりて、灌漑又便に、新ふ田圃を開き給へり、

仁徳天皇以前には、難波の地は、廣き野原より、田圃の間、矮屋の散在するに過ぎざりき、天皇の都となりて後は、四方より人民輻輳して、稍繁盛とありたり、

七 天王寺

大坂市の南に有名なる天王寺あり、よの寺は今より千三百年ばかりの昔、聖徳太子の建て給ひし所にして、おが國の寺院中、最も古きものなり、

聖徳太子



聖徳太子の頃、三韓より
 佛像經文を奉れり、あれ
 わが國佛法の起原あり、
 此より前は、専ら神と祭
 り、葬祭祈禱一ふ神によ
 りを以て、佛は蕃神あ
 り蕃神いかでの尊敬す
 べきなどいひて、之を忌
 み嫌ひ一人多く、中よも
 物部守屋、中臣勝海など

は、甚しく厭ひて、佛像經文を焼けり、聖徳太子は
 之れ又反して、大に佛を信じ給ひ、又蘇我馬子も
 佛を信じたりき、かく好悪相異なるより、自然争
 を生じて、守屋と太子との間に、一の戦起りて、守
 屋は稻城を築きて之に籠れり、太子は馬子と共に
 守屋を攻め殺し給へり、河内の澁川郡太子堂
 村は即稻城のありし地にて、勝軍寺とは今尚ほ
 守屋が墳あり、
 守屋止びし後は、太子馬子の威勢盛にして、反對
 するものなかりしがば、寺院を立て、大に佛法

を興せり、天王寺は即ち太子が守屋に勝ち給ひ
一時、建て給ひ一寺あり、是より佛法日に弘り
て、到る處、僧尼寺院を見ざるはなきふ至れり、
聖徳太子は固聰明叡智にまゝまゝければ、時の
天皇を輔けて、諸の政治を執り行ひ、良法善制
を定め給ひ一御方なり、

八 長柄豊崎宮

豊崎の宮は 孝徳天皇の皇居なりき、今の長柄
地方は其遺跡なり、 孝徳天皇は 仁徳天皇よ

り三百年ばかりの後なり、其御代は尤も著しく
顯はれたり、

神武天皇國造稻置等をれきて、國々を治めさせ
給ひ一が、是等の官吏は其職を子孫に傳ふる習
なり一より、年を経代を重ねるに従ひ、部下のも
のは其家臣の如くあり、政治は我儘となり一が、
此項及びびては、愈甚しくなりき、是に於て 天
皇新に國司の制を定め、國々を治め一め、國造等
を廢し給へり、國司は任期四年よりて交代す、又
官吏富豪が貧民の田宅財産を兼併する風盛に

一、國々の民次第又貧窮とあり、戸口大に減少し、流浪無頼の徒増加しければ、新ふ口分田として、一人に付、若干の田地を與ふる制を定めて、兼併の弊を禁ト給へり、其他諸の弊政を改革し、善政を施し給ひしより、國富み人賑ひて、天下太平を謳歌し、文化も著しく進歩せり、後世此改革を大化の改新と云ふ、大化は此御代の年號よりして年號の始あり、

九 天滿宮

大坂の天滿又天滿宮あり、天滿宮は菅原道真を祭れる社なり、道真は今より千年ばかりの古人にして、世又菅丞相又は尊みて天神と云へり、道真は醍醐天皇の朝に仕へ奉りて、右大臣となり、左大臣藤原の時平と共に、天皇を輔佐し奉れり、道真幼より文武の兩道を修め、博學多才、時務又練達しければ、裁決流るゝが如く、庶政一時又振起せり、之に加ふるは、性謙讓よりして能にほとらず、事を執ること公平ありしは、恩遇日に盛よりして、聲望も亦愈高かりき、時平官其上より

菅公ノ像



位をれども、其勢の及ばざるを恨み、遂に道真を讒誣せり。天皇之を信じて、道真を太宰権帥と貶し、筑紫に遷し給ひり。かく道真は罪なくして配所と遣られしも、毫も天皇を怨み奉らざるのみならず、毎朝拜賜したる御衣を捧げて、天

恩と感泣せり。村上天皇の御代、民間其徳を仰ぎて、其祠を建て、其靈をまつれり。後朝廷よりのも神社に列し給ひき。

十 通法寺

河内古市郡通法寺村に通法寺あり、源義家の墳墓のある處なり、義家は八幡太郎と稱して、今を去る八百年ばかり昔の名將あり、義家天資剛邁にして能く兵を用ゐ、尤も騎射は巧なりき、嘗て戲し冑六領を射とほしけり、其父

又従ひ、奥州の安倍貞任を討ちし時、一度は敗れて大兵又圍まれしを、義家縦横奮戦して、敵又射向ひたるに、百發百中弦又應じて斃れければ、敵兵大に恐れて引き去れり、貞任平ぎて後、大江匡房が義家は兵法を知らずと評せしを聞き、直み匡房に就きて兵法を學べり、是より智略益進み、奥州再び亂れたるとき、容易く武衡等を平げ、武名益揚がりき、

此時平氏にも名將多かりしが、朝廷は藤原氏威權を擅にして、紀綱大に頽れしかば、漸く武門政

治の世の中とはなれり、

十一 逆櫓松

福嶋村に逆櫓の松とて名ある松ありしが、此松今は僅み木痕のみを存すれども、其名は今に残りて人の能く知る所あり、逆櫓の名の起りしは、今より六百五十年ばかりの昔に、有名なる源平の戦ありき、源氏の大將は九郎判官義經とて、世に稀ある英雄なりければ、平家のたてこもれる一の谷の城を攻め落し、平家が讃岐の屋嶋に逃

大内史記
げたり一を再び攻め落さん爲ふ、福嶋村に舟を
集めて渡海の用意をなしたり、此時梶原景時進
み出で舟に逆櫓を設けて、其進退を自由なすべ
しと言ひければ、義経頭をふり、逆櫓無用なり、我
は進みて死するを知るも、退きて生くるを願は
ずと言ひて、舟を出し、直に屋嶋を攻めけるは、平
家あわてさりとどきて大に敗れたり、此議論を逆櫓
の論と言ひ一を、其處にありし松よままで、其名の
及びたるなり、
是より後、義経は平家を追りて、處々の戦に打勝

ち、遂に平家を亡ぼして、源氏の世となりたり
が、兄頼朝も忌まれて、自殺して果てけり、是より
天下の政事は頼朝に歸し、畏くも 皇室は名の
みとなり給へり、

十二 金剛山

河内の金剛山は群山の上に屹立して、遠く四方
より望み得べければ、皆人の知る所あり、若し六
の山は遊ばず、赤坂千破劍二城の址を見るなら
んは、二城は古楠正成の築きて忠戦せし所あり

り、正成は忠節雙び無き人なまば、今其事蹟を話すべし、

頼朝霸たり、後北條氏續きて大政を執り、世々不忠のこと多かりしが、百餘年を経て高時に至り、暗愚にして愈不忠無道を極め、上を蔑に、民を虐げければ、後醍醐天皇之を怒りて、高時を誅せんと謀り給へり、高時之を知りて、畏くも天皇を遷し奉れり、高時はかく大逆のものなりけれども、當時の大名等、高時を恐れて勤王の兵を起すものなかりしに、楠正成獨り 天皇の詔

を奉じて義兵を擧げ、金剛山の山續きに、赤坂城を築きてこめれり、此時正成は河内の豪族に過ぎざりしかば、其兵は僅に五百人よりして、賊の大軍に比ぶべくもあらねど、正成才略人にすぐれたれば、或時は伏勢をして敵の不意をうち、或時は大木巨石を投げ、或時は沸湯をそそぎて、數多の敵を殺し、大に賊兵をなやましたり、然るに兵糧盡きけるによりて、遂に赤坂城を遁れ出で、身をかくし、再擧の時節を俟ちたりき、正成間もなく、兵を擧げて、赤坂城を取りかへし、



千破劍城

河内和泉の賊兵を討ち、
進みて攝津の天王寺より
出で、賊兵五千人を破り、
後河内よりかへり、金剛山
の千破劍に城を築きて
こもれり、賊の大軍再び
城を圍みしむ、千破劍は
赤坂城よりは遙く堅固
なるが上に、また奇計を
以て、屢賊兵を殺しけれ

ば、賊軍は術に盡きて手ををさめ、只城をながめ
てぞ日を送りけり、かゝり一程に、天下の大名等
も、正成の誠忠に感して、四方より勤王の兵を起し、
遂に無道の高時を誅せり、是に於て、大政は再び
皇室より歸り、天下は王政の恩澤に浴すること
を得たりき、正成の忠義と千破劍の城とは、共に
人の仰ぎ見る所あり、

十三 櫻井驛

幾程もなく、足利尊氏叛きて、天下再び大に亂れ、

尊氏大兵を率ゐて、九州より京師を迫りければ、正成は京師より直ふ湊川に趣きけり、正成此戦の必ず敗るべきを知り、復生きて歸らざるべき決心なりければ、子正行が年十一にして従ひけるを、攝津嶋上郡櫻井驛より、本國河内に歸らめ、亡後の守りとせり、其時正成遺訓しけるや、今度の戦、天下安否の分るゝ所、今生よて汝が顔を見んこと、是を限りと思ふなり、われ討死せば、天下は必ず尊氏の世となさるべし、汝正行妾に身命を惜みて、父が多年の忠義を失ひ、降人に出づ



楠公父子訣別

ることあるべからむ一族郎黨の一人よても、残りてあらん程は、金剛山にたてゑり、必ず敵慮を安んず奉るべし、是ぞ汝の第一の孝行あるべきなり、いと懇に遺訓したり、

かくて正成は湊川にて、足利尊氏の大軍と戦ひ、

果して討死せしむ。逆賊尊氏も其忠義に感ずたりけん、態々正成の首を正行のもとに送り遣りたり、錦部郡觀心寺にある楠正成首塚は、それを埋めし所なり。

十四 四條暇

正行櫻井驛より、父正成に別れて、河内又歸りし後、父の遺訓肝に銘し、朝敵討平の念、片時も忘るること能はず、平生の遊戯も、是は朝敵を追ふあり、是れは尊氏を斬るありなどいひて、日夜兵

法武術の心を注ぎしむ。生長の後、は智勇人にすごとく父も劣らざる名將となれり、されば僅に七百人の兵を以て、賊將細川顯氏の兵三千人を河内の丹南郡譽田林に破り、又山名時氏等の大兵を住吉に破り、其他所々の戦も大勝を得て、正成討死の後、大に衰へたりし勤王の兵を振起したりき、逆賊尊氏大に恐れ、高師直に兵八万人を附し、正行を拒むしめたるに、正行はこれぞ最後の戦と思ひければ、後村上天皇に御別れを申し奉り、後醍醐天皇の廟を拜し奉り、

四條畷神社



かつらぎと、

のねて思へば、梓弓、

なまかぎよりの、

名をぞ留むる、

と詠みて、四條畷は出で
て、師直と戦ひけり、大の
戦正行、必死を極めたれ
ば、日頃の戦ひよりも一
層勇猛として、師直の大
軍、正行の三千の兵は敗

られ、師直已に危うしが、正行の兵も、終日の血
戦、殆ど死傷し、其身も亦蝟の如く矢を受けた
れば、遂に自害して討死したり、寔に其誠忠父は
耻ぢすと云ふべきなり、近年此地は社殿を營み
其靈を祀り、今上天皇其忠を嘉し給ひて、別
格官幣社に列したまへり、四條畷神社是あり、

十五 観心寺

正行討死の後は、賊勢日々猖獗となり、後村上
天皇は大和の吉野を出で、河内の天野山は行

幸一給へり、錦部郡にある觀心寺は、其行在所よりして、今尚ほ其遺跡を存す、當時此行在所を守護し奉りたるは、正行の弟正儀あり、正儀も亦智謀に富み、且勤王の志厚く、父兄の遺志を繼ぎて、賊軍を防ぎ、哀運の王室を守護し奉れり、其一生の間、河内、和泉を轉戦し、屢賊軍を破りき、惜いかな、皇運を恢復するに及ばずして、千破劍城に病死せり、正成、正行、正儀三世の間、楠氏は終始皇室を守護し奉り、嘗て貳心なごりしは、古今雙びなき忠義ふれば、後世楠氏を以て、忠臣の第一とす。

十六 石山本願寺

今より四百年の昔は、今の大阪城は、織田信長と隆とされし石山本願寺のありし所なり、石山本願寺は一向宗僧徒の寺院なり、慈悲を旨とする僧侶よりして、兵器をこりて武人と鬪争し、清淨を主とする寺院を以て、戦争の場所としたりは、今より觀ればいふかきふ似たれども、足利氏の時代には、天下は亂れに亂れ、土地も定まりたる

主としてはなく、只強力なるもの、擅に奪略せる世ある故に、僧徒も此機に乗じて土地を横領するに至れり、されば寺院にして、城の如く堅固なる壘壁を築き、深き塹を繞らしたるも怪むる足らず、石山本願寺も其一ありなり、其頃和泉の國又は、紀伊根來の僧徒來りて、土地を横領せり、かく土地をも領し、兵器をも蓄へ戦争を事としければ、信長又これを亡ぼせり、されど信長の如き豪傑も、石山本願寺を亡ぼすには、長き歲月を費して甚苦心したるを見れば、此頃僧徒の倔

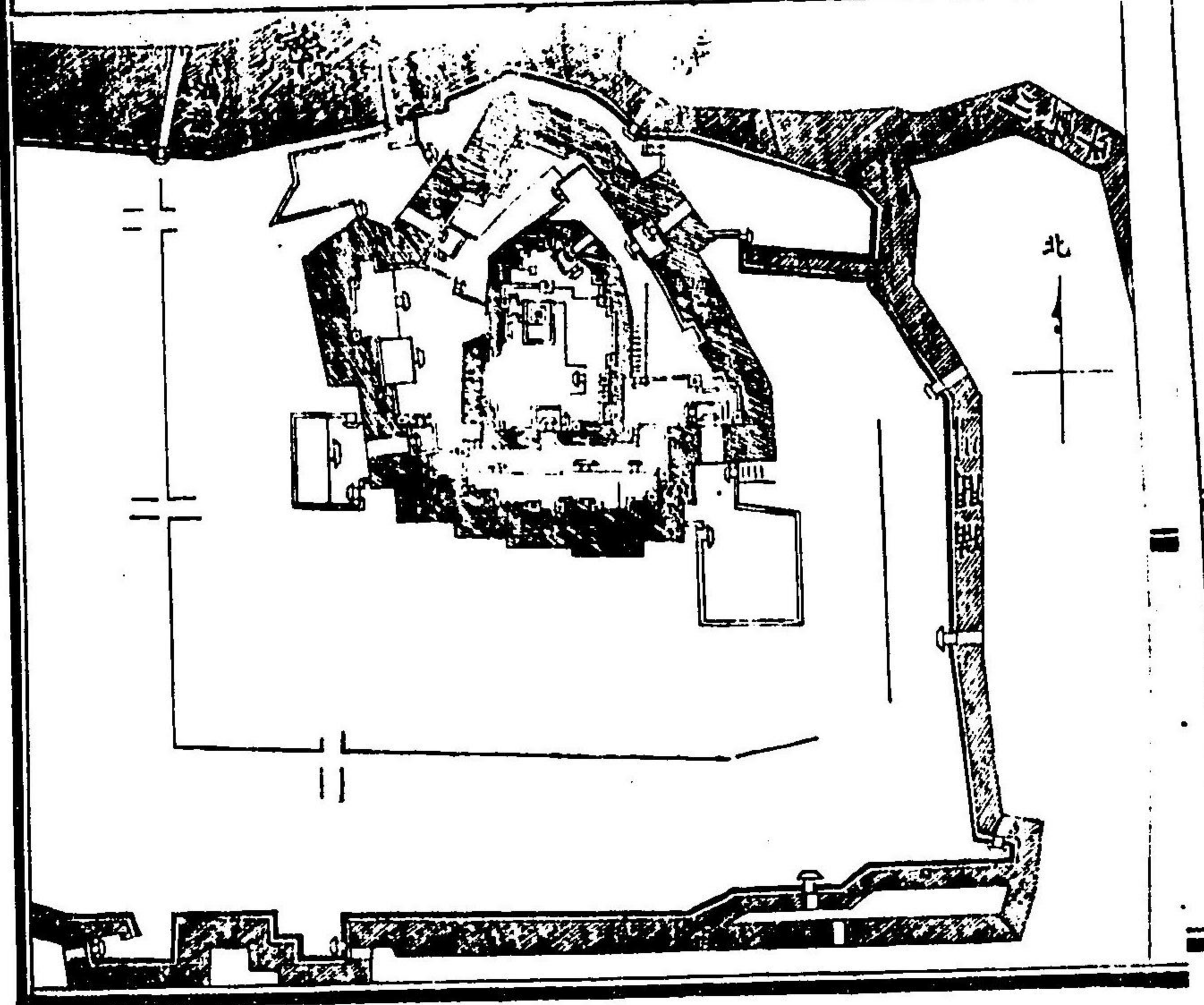
強なりしを想ひ見るべし

十七 大阪城の一

大阪城の其壕の深くして、其石垣の高大堅固なること、皆人の驚くところなり、此巨大なる建物は、今より三百年ばかりの昔に、豊臣秀吉の築きたるものなり、其當時は高大なる天主閣壯麗なる殿樓、立ちならびたりしかば、今よりも一層偉觀ありしなるべし、秀吉は世々太閤と云ふ人にして、大阪城に在りて天下に號令しわが大阪と

い深き縁故あれば、
今より此人の傳を
話すべし、

秀吉は尾張國の百
姓の子にて、初め藤
吉郎と云ひ、廿歳の
頃、其國の大名織田
信長の草履取とな
り、元來智略天
授の人なれば、次第



に進みて、遂に一方
の大將となれり、信
長の死したる後は、
其遺志をつぎ、八年
の程に筑紫のはて
より、陸奥のれくま
で、悉く討ち從へて、
天下の太平を致せ
り、秀吉尚ほ足れり
とせず、支那、朝鮮を

大阪古城之圖

例
凡
城門
城壁
堀川
土橋



豊臣秀吉之像

大坂城史記
も討ち從へんと欲し、大軍を出して、朝鮮に攻め入り、朝鮮支那の兵を破り、殆ど朝鮮の全國を取り、支那にも攻め入るべき勢なりしが、適病を以て薨下れば、わが軍中途にして、悉く歸り來れり、世に之を秀吉の朝鮮征伐と云ふ。

十八 大阪城の二

秀吉薨下たるのち、子秀頼尚ほ幼ありければ、天下は徳川家康と歸せり、秀頼は攝津河内和泉の城主たるに過ぎざるを以て、心稍不平なりしが、

方廣寺を造りたるより、家康と不和を生ぜり、當時茨木の城主たりし片桐且元は、秀頼の傳よして、屢秀頼を諫め、家康を宥めけれども、事遂に調はずして、秀頼兵を集めぬ、家康大軍をひきゑて、大阪城の四面を圍み攻めけれども、城堅くして容易と抜くこと能はず、木村重成、後藤基次、真田幸村の諸將又能く戦ひて、屢東軍を惱したり、已にして、家康和議を出して、事一旦治まりたりしが、明年和議破れ、家康復大軍を以て大阪城を攻む、茶臼山に於て東西兩軍大に戦ひ、互に勝敗あ

り、真田幸村尤も勇猛ありしが、城内俄に亂れて、遂に大敗し、秀頼自殺して、豊臣氏亡びたり、或いは秀頼は薩摩に逃れたりともいふ、世に去の二度の戦を、冬の役夏の役と云ふ、蓋前の戦は冬より、後の戦は夏よりを以てなり、

大阪落城の後には、豊臣氏の領地を分ちて、小藩と公領とになし、公領は徳川氏の直領にて、大阪は城代を置きて其守となし、又其下は町奉行を置きて大阪を治めたり、城代町奉行は徳川氏より其家臣を撰みて之を任じ、世襲せしめず、藩には

藩主ありて其領分を支配し、其下は武士ありて諸般の政を行へり、是より後明治四年に至るまで、此有様にて續き來りぬ、

當時の武士と稱するものは、其主君より禄を受けて、之を子孫に傳へ、戦争起れば出で、兵士とあり、平常は入りて官吏となり、別は職業を修めず、平民は世々農工商の業を執りて、官吏とふるを得ど、又武士に比ぶれば無力にして、武士と理非曲直を争ふを得ず、故に武士は威權を弄して、屢無理難題を云ひ掛くれども、平民は之れに抗

もること能はざりき、又武士は常に二刀を帶
て、時よは刀を抜きて平民を脅し、或は殺傷する
おともありしは、危険いふべからざる世なり
き、

十九 瑞軒山

瑞軒山は安治川の川口にありし丘より、今は
其名のみ残れり、此山は今より二百年ばかりの
昔、川村瑞軒といひし人、淀川を浚へし時、積み
上げたる土砂の成りたるものなり、

大阪落城より後は、淀川の下流いたゞ荒れ、堤防
壞れて河道を狭くし、泥砂積りて河床を埋めけ
れば、夏秋の候大雨ふ遇へば、河水潰決して四方
に汎濫し、田圃を没し、民舎を流し、人畜を害する
こと、年々に絶えず、又船舶の出入を妨げ、物貨の
運漕漸く不便とふり、商民の患となりしは、天
和三年徳川幕府より瑞軒に淀川治水を命じた
るなり、

瑞軒は天性穎悟し、奇智に富み、少時海邊ふ
漂へる茄子、瓜を拾ひ集めて鹽漬とし、賤民にひ

さき、大ふる利益を得て其家を起したりき、其後種々の商業に従ひ、常々利益を収めて遂に巨商となれり、其治水の命を受けたる時、先づ攝津河内、山城、大和を跋渉し、淀川の水源より河口までの地勢を審かにし、さて後又大計を定めたり、本流はつふまげもなく、神崎、長柄、中津の支流に至るまで、其土砂を浚へ、其堤防を築き、又は新に溝渠をつくりて、其水量を減じ、遠く水源の諸山より樹木を植ゑて土砂の流下を止め、五年を経て成功したりき、是より後、大水出づるも洪水

の患はあく沼澤は變トて良田となり、船舶の出入は自在となりて、永く大阪地方の幸福となれり、此大事業は官命又はあれど、瑞軒私財を投じたることも勘わらざるといふ、

是より百五十年ばかりを経て、天保年間再び淀川を浚へたるが、安治川口の天保山は、此時積み上げふる土砂の成りたるものなり、是れ亦今の僅に其趾を見るのみなり、

二十 天野屋利兵衛

此項赤穂義士の復讐として、有名あることありき。この復讐を助けて、其名今に高き天野屋利兵衛は、おの大阪の商人にてありしなり、赤穂の城主浅野侯の屋敷に出入して、大に愛せられたる人なり、浅野長矩吉良義英に辱められて自殺し、其家臣大石良雄等以下四十七人、其復讐をはふるに及び、利兵衛も助けて、武具を調達しけるが事顯はれて捕へられ、獄中の拷問甚厳しく、屢氣絶するに至りたれども、自白せざりき、後一年を経、良雄等の事遂げたるを聞き、初めて自白す

るやう、我家世々浅野侯の大恩を受けたり、良雄等の復讐を謀るに、義として之を助けざるを得ず、去年敢て言はざりしものは、身命を惜みたるに非ず、忠臣義士の苦心を空くせんことを恐れて、雄々しく云ひ出でたり、官其義に厚きを賞し、死を宥めて追放の刑にあり、また其子も家をも續ごしめたり、利兵衛は家を出で、後浅野家に縁ある寺に寄寓して、一生を終りたりといふ、義心も富みたる人といふべし。

二十一 契冲阿闍梨

大阪落城の後、世は太平となりたれば、學の道次第又盛になり、此頃僧契冲とて有名ある學者、大阪又出でたり、

契冲は元尼が崎の人として、幼少の時より僧となり、只管學の道又刻苦し、殊にわが國の古語を修めて其奥を究め、名天下又聞はたり、性寡慾として、玉造あたりに庵を結び、花月を友として一生を送れり、其庵を圓珠庵と稱して今猶存せり、

僧契冲像



明治廿五年正四位を贈られたり、嘗て徳川光圀其名を慕ひ招ましかども、辭して行かざりき、更に光圀の請又應じ万葉代匠記を著しければ、光圀大に喜びて、金千兩、絹三十匹を送りしを、悉く貧民に分ち與へたりと云ふ、

契沖以前又はわが國の古語を修むるものは、甚
少く之を修むるも僅に其一端を知るに過ぎざ
りしかば、わが國の古事は、暗夜の如き有狀なり
しに、契沖古語を明せしより、其光より遂に
一派の學問となり、國學と云ふに至れり、されば
世に契沖を國學中興の祖と云ふなり、

二十二 懷德書院 附含翠堂

懷德書院は今はなけれども、三十年以前までは
今橋通にありたる學校なり、此書院は此頃有名

なう中井甃庵の官に請ひて建てしものなり、
元來大阪の地の學を修むる人少かりしが、甃庵
此書院を建てしより、子弟の學を修むるもの増
加し、又諸國より來り集りしは、讀書の聲四方
に起り、有名なる學者相つぎて出で、大阪の文學
盛ふなれり、其子竹山、履軒及び門人五井蘭州は、
共に有名なる學者にして、甃庵の後をつぎ、此書
院の教授となり、子弟を教育せり、
此時平野村又土橋友直と云へる人ありき、幼よ
り學を好み、諸方より遊學し、後郷里より歸りて講堂

を立て、含翠堂と稱し、土地の少年を集めて教育せり、時々諸方より有名なる學者を請いて、講義をも聞あしめたり、領主土井氏大之を喜び、後藩の學校として、永く残りあり、友直はかく學問に力を盡したるのみならず、郷人に勸めて、平日に金銭米穀を集めて貯へ置かしめ、凶年に貧民に施與する法を立てしめたるなど、公益をはかりしこと多かりき、さて當時懷徳書院、含翠堂の如き學校あり、獨りわが大阪にのみありしにあらざり、藩に藩立の學



校あり、又都邑に私塾あり、寺子屋ありて、各子弟を教育せり、寺子屋は今の小學の如きものにて、幼き兒童に習字讀書算術を教ふる所なれども、讀書算術の習古は稀し、大抵習字をのみ習古したりき、平民は大抵寺子屋まで終り、士分

に至りて學問をなまを常とし、

二十三 大鹽平八郎

大阪落城の後、人民戦争の聲を聞かざりし、二百
年ばかりを経て、大鹽平八郎の亂ありて、一時は
大に騒ぎたりき、

平八郎は大阪の士なり、博學にして時務に通じ、
兼ねて又豪邁果斷なりければ、難事を治めて、屢
功を奏せり、或時市内の奸商等、市民を虐げしこ
とありき、此事當時の貴顯の家臣にも關係あり

ければ、人皆如何と思ひけるに、平八郎直に奸商
等を執へて、悉く罪に處し、其私する所の金を市
民と與へしむば、人々其剛直と驚きたり、其後官
を辭し、子弟を教授せしが、天保八年米價俄に騰
貴し、貧民の餓死するもの多きを歎き、平八郎町
奉行と米廩をひらきて、民を救はんことを勧め
けれども、町奉行これを聽かざりければ、自ら金
錢米穀を擲ち、貧民に與へて人心を收め、攝津河
内、和泉の民を誘ひて町奉行等を亡ぼし、世を救
はんをせり、中途より事あらはれければ、平八郎

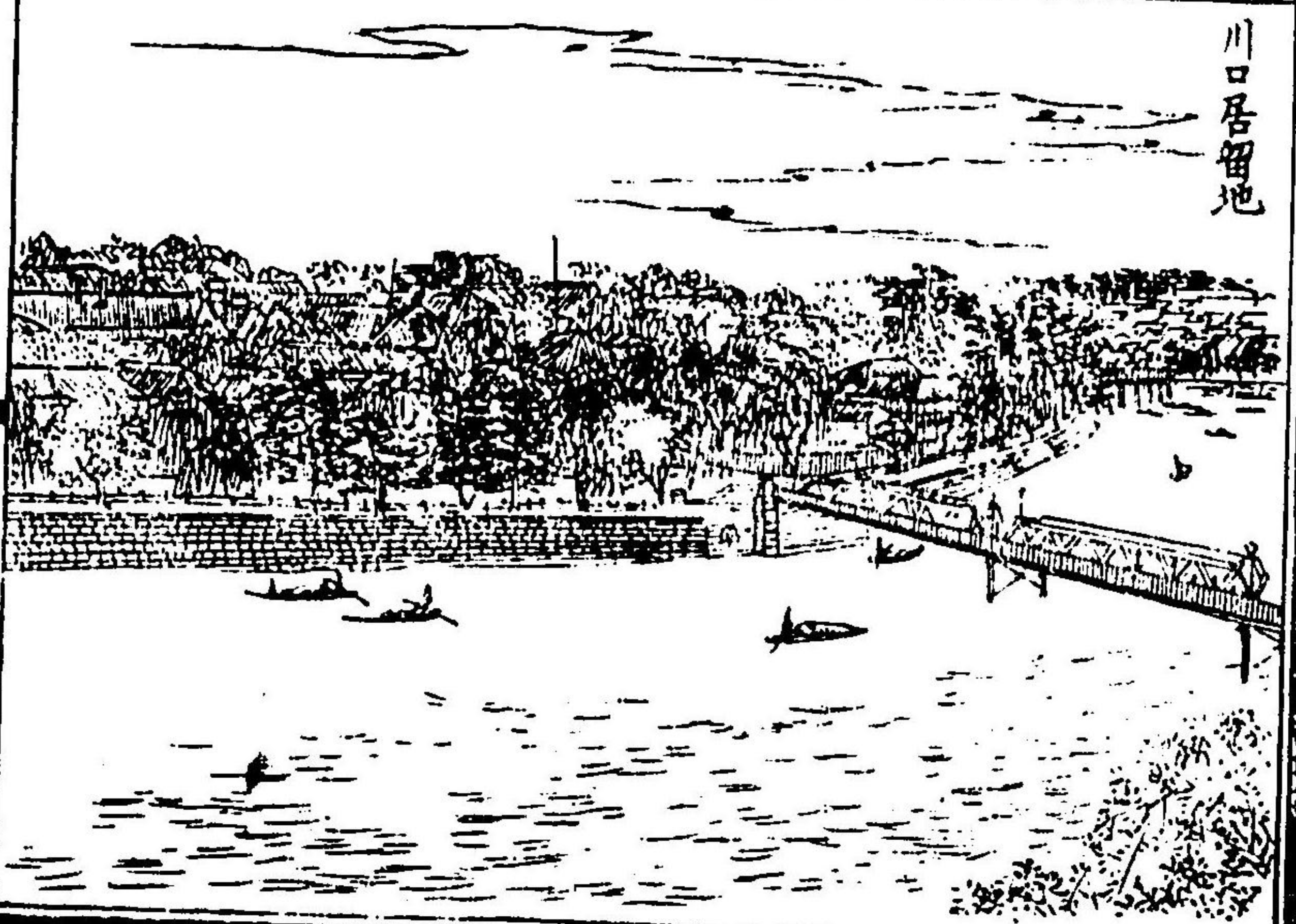
急な黨與を集めて、火を市中に放ち、城代と戦ひ、大いに敗れて捕斬せられき、或は川口より船より西國に走りたりとも云ふ、

二十四 天保山の砲臺

安治川の河口に砲台あり、この砲臺は今より數十年前に造りたるものなり、初め西洋人の來りて通商貿易を求むるや、彼等の乗り蒸氣船は、わが國にば未だなかりければ、當時黒船と云ひて、いたく驚きを恐れ、是は必ずわが國を攻むる爲

ならんなど思ひければ、天保山の砲臺を築きて、大阪の備へたりき、今尚ほ其趾を存せり、されど此項より通商貿易が始まりて、次第に盛大に趣き、王政復古の後、通商する外國も大に増加し、交易も益盛大となり、かば大阪も外國人

川口居留地



の居留地を設けて其住居を許せり、是等の居留人は、宣教の爲のものもあれど、大抵商業の爲に來りしものなれば、今は内國との取引のみならず、外國人との取引さへ加はりて、大阪の商業は益盛大となりたり。

二十五 大阪府

明治元年徳川氏大政を 皇室にあらへ奉れり、之を王政復古或は維新と云ふ、此後ハ大阪城代を止めて知事を置き、新ニ大阪府と稱せり、明治

四年更に各藩を廢し、攝津七郡を大阪府の管轄とし、河内、和泉を堺縣とせり、九年大和の國を堺縣の管轄に屬せしめ、後又堺縣を大阪府に合せり、二十年大和國は分れて奈良縣となりて、大阪府は攝津七郡と河内と和泉とを管轄せり、現今の大阪府即ち是なり、府の下に八郡役所を設け、一郡乃至數郡を治めしむ、又二市十二町三百九村あり、各自治の制を布けり、又地方の經濟を議せしめんがために、公撰議員より組織する議會を設けたり、即ち府ふ府會あり

り市は市會あり、町は町會あり、村に村會あり、市會は明治二十二年より始まりたれど、其他の議會は十二年頃より始まりたり、

二十六 結論

一 一般の沿革

神武天皇東征の時、此地其道筋となりて、浪速河内の名、已に世に知られたり、天皇即位の後、此地王化を浴して、永く靜寧無事ありき、其後六百年ばかりを経て、崇神天皇の御代、河内の

狭山池を造り給ひ、垂仁天皇の御代、又多く池溝を造りて、大に此地の農業を進め給へり、和泉の血努池は、其遺跡の現存せるものなり、
成務天皇の御代、始めて難波河内の國境、并ふ郡村の境域を定め給ひぬ、神功皇后三韓征服の後、は、此地朝貢船の湊とありぬ、されば此頃より船舶の出入をる所となりしあらん、
仁徳天皇の御代、難波は帝都となりて、稍繁華となれり、天皇は三年の租を免し給ひしのみならず、淀川の堤防を造りて、水害を防ぎ、溝渠を掘

りて灌漑ふ便よし、大よ田園を開き給へり、御
子 反正天皇は、河内の丹比を帝都とあり給ひ
き、降りて聖徳太子の時、河内に物部守屋の亂あ
り、孝徳天皇の御代、又難波の地に都し給ひき、
今の長柄は其遺趾なり、天皇の御代、國造等の
官罷められて、始めて國司を置かれぬ、天武天
皇の御代、攝津の國司は攝津職とありしを、桓
武天皇の御代、再び國司の制を復しぬ、天武天
皇の御代、河内の三郡をさきて、和泉國を置き給
へり、後和泉郡を分ちて泉南の二郡となし、今の

大鳥、日根、泉、南の四郡とふせり、

後醍醐天皇の北條高時を討ち給ひし時、楠正成
河内ふ起りて、勤王の大義を主唱し、前後赤坂千
破劍の二城ふよりて、大軍と戦ひ、中興の偉業を
輔けしを、足利尊氏の叛をうに及び、湊川に討死
せり、其子正行亦父の志を繼ぎて、河内、和泉の地
に戦ひ、屢賊軍を破りけれども、四條畷の戦に命
を殞しぬ、弟正儀其後を承けて、忠戦に勵み、千辛
萬苦、終に千破劍城に病死しぬ、此頃山名氏清塚
に城を築きて居りき、氏清敗死の後、大内義弘中

國の大兵を率ゐて堺に據り、足利氏も反し、防守
數月も及びし、城陥りて自殺しぬ、かく氏清義
弘の亂相續いて起りたりし、堺の地は漸く繁
盛し、商船の輻輳、當時わが國第一となり、堺の名
は外國もまで知らるゝに至れり、然るに其他の
地方は、戰亂相續きて、大名等各地もよりに互に
領地を争ひ、又石山本願寺には一向宗の僧徒あ
り、和泉は根來寺の僧徒ありて、暴威を逞らせ
り、織田信長の四方を攻伐するに及び、この地の
大名等、或は服従し、或は敗亡し、攝津和泉の僧徒

等も追拂はれて、信長の領地となりぬ、

信長弒せられて後、此地秀吉の領に歸し、大阪其
居城となれり、是より於て大阪はわが國の首都と
なり、忽ち大都會となりぬ、豊臣氏亡びて徳川氏
の世となりし、大阪城は天下の要衝あるを以
て、城代を置き、又大阪、堺は、要津あるを以て、奉行
を置きて直轄とし、其餘は大名を分封せり、即ち
麻田、高槻、丹南、狭山、岸和田、伯太の諸藩是なり、麻
田は青木氏、高槻は永井氏にして、攝津の國も屬
し、丹南は高木氏、狭山は北條氏にして、河内の國

に屬し、岸和田は岡部氏、伯太は渡邊氏よりして、和泉の國も屬せり、徳川氏三百年間は、大鹽平八郎の亂を除きて、此地靜寧なりしをば、文運進歩して、農工商業も大に開けぬ、殊に大阪は商業大に進みて、全國商業の中心となりたるあり、明治維新の後、大阪府を置き、四年藩を廢して、攝津七郡を大阪府とし、和泉河内を堺縣とせしが、十四年堺縣を廢して大阪府と合し、遂に今日の境域とはなれり、かく施政上の變化と共に、文明の進歩の著しく

して、二十六年間の進歩は、遙に徳川氏の三百年間に勝れり、乃ち小學校の設立は、普及して校舎を見ざる地なく、中學校、師範學校、醫學校、農學校、商業學校、高等女學校の設ありて、中等教育を施せり、之を徳川時代の寺子屋、私塾と比ぶれば、驚くに堪へたるものなり、又、瀧車、瀧船、電信、電話の如き交通の利器は、りて商業を助け、新なる器械よりして工業は進歩し、徳川時代とは、嘗て見ざる烟突は林立するに至れり、亦の進歩と繁榮とは、偏ぶ、今上天皇陛下の銳意治を勵まし給

へる恩澤も出でたるものなり、

二 農業の沿革

大阪地方の農業最も早く開け、神武天皇の頃已ふ耕種の道を知り、田圃は開墾せられたるあり、崇神、垂仁の兩朝も至り、河内、和泉の地、池溝の設具はりて、田圃大に開け、農業進歩せり、仁徳天皇の朝、攝津の地の、河川の水理由園の開拓盛まりて、農業の進歩大に著かりき、天皇の詔ふ、此國郊澤曠遠にして田圃少しとあるを

見奉れば、此御代迄は、攝津の農業は微々たりしならん、この時代に、吳織、漢織の二姫來朝して、機織の術始まれり、池田町の當時二姫の來着したる所なれば、今も於ても之を吳服の里と云ふ、雄略天皇の御代、養蠶の獎勵盛なりければ、養蠶の業大に起れり、茶の支那より渡りし後は、茶園も亦起れり、牧畜の業ハ古來盛まりて、攝津鳴下郡の鳥飼村、豊嶋郡の牧村は、有名なる牧場ありて、攝津國駒の名世に高かりき、されども後世田園の開くるに従ひ、牧場の失せて、牧畜の業終ふ

跡を絶ちたり、源平時代より後も、多少の進歩ありしなるべし、徳川氏の代は、戦國の際一時沈淪したりし農業を振起せしのみならず、河源の山林を保護し、其堤防を修理して、大に農業の盛大を致せり、

三 商業の沿革

大阪は平野遠く開けて、道路四通の地勢を占め、淀川河口に跨りて、西に大阪灣を受くれば、實に水陸の要衝たり、堺も亦西に良港を控へて、要津

たる形勢あり、されば商業の繁榮は、この二市より起るべき理あり、されど古は風俗質朴にして、交通不便ありしが、商業も盛らざり、人民多くは自耕し自織り自作りて生活せり、故に大阪の地も、古は蘆葦叢生して、難波の蘆の名も高かりし、但船舶の出入は、古より稍盛なりき、難波を津の國と名付けしは、是より起りしならん、後國府の大阪と定まりしより、稍繁盛となりしならん、が、未だ商業と名づくべき程の事はなかりき、降て山名氏清丹波和泉の大名となりて、堺を居城

こしけるより、堺は漸く人家増加し、商業稍起りたるが如し、氏清敗死の後、大内義弘大軍を此地に屯して、城樓を修めて足利氏と反し、遂に此地に討死せしむ。此時より商賈は四方より輻輳し、船舶は遠近より入津して、一大商業地とはなりたり。天文の頃に至りて、外國船舶も此地より來りて、新し外國交易を開きければ、内外商業の中心となりて、堺の名は世々高かりき。天文は今より三百六十年ばかり昔の年號あり、此頃大阪は尚ほ未だ繁盛ならざりて、生魂莊内の一部に過ぎ

ざりし。豊臣秀吉の大城を築きて、此地に居りしより、商賈輻輳せしむ。此地元來至便の地勢を占め、且秀吉の計劃盡力により、忽にして大都となり、商業の中心となれり。かく大阪の繁榮するに従ひ、堺は漸く商業の中心たる地位を失ひし。尚ほ大船巨船は此地より來り、又外國交易は依然として盛なりき。徳川家光の外國交易を禁ずるに至り、此地の商業は、遂に大阪よりたどるに至れり。之に反して、大阪は川村瑞軒の治水により、船舶の出入容易となり、又國々の大名等は豊

臣氏亡びても、尚ほ其屋敷を置き、國産の市場
とまじ、且其運搬に便せんと爲に、溝渠を開き
てを以て、水運の便一層進み、此地の商業益發達
し、遂に百般の貨物、一度もこの大阪を経ざれば、其
價格定らざるといふる諺と一あるに至れり、
明治維新の後、電信、汽船、汽船等の如き交通の
利器新し生じ、大阪の商業は益繁榮の域に進み、
蛛網の如き電線と、晝夜間斷なき汽車の發着と、
川を埋むるばかりの汽船、帆船とは實に此市の
現今商業の盛大なるを示せるものなり、

四 工業の沿革

高津の瓦、宿野村の土器の如き二三の工業は、古
已に開けり、元來工業と商業とは、互に其進歩
を助け、一方の盛大は、他の繁榮を導くものなれ
ば、古商業の進歩せざる時にたきては、工業の微
微たりしは明なりしも、堺の内外市場となりて
より、此地に諸種の工業勃興し、鑊砲、庖丁の類、其
名殊に高し、徳川氏の世となり、商業の愈發達す
るに従ひ、工業も益盛となり、池田、伊丹の酒は其

名遠く擴りて名産と聞えたり、明治維新の後、
堺の緞通其名世より高く、近年に至りては、紡績硝
子燐寸煉瓦等の類、工業陸續興起し、前古未曾有
の盛大を現せり

附説

一 鏡砲

鏡砲は天文年中、西洋人始めて種子嶋より來り
て傳へたり、此頃堺の商人橋屋又三郎、交易の
爲に種子嶋に至り、鏡砲を見て、其製造法を習

ひ、歸國の後、其製造を始めたり、これ乃ち堺鏡
砲の起原なり、當時戰國の際なりければ、大名
の注文甚多くして、忽ち盛大となり、徳川氏の
世よりは、十九の製造家其軒を併ぶるに至れり、
明治維新の後、其業大に衰へて、今は唯其舊話
の存するのみ、

二 段通

堺の商人藤本莊右衛門といひ、一人肥前鍋嶋
の緞通と支那の敷物との製法より、一種

の緞通を、天保二年より始めて織り出せり、其子孫世々其業と其名とを継ぎて、今日より及ぶと云ふ、

文久二年、大阪の職人久七といふもの、天鷲絨の織法に摸して、摺込みの製法を發明し、莊右衛門が手編込の緞通と、相並びて、二種の製法あり、明治維新の後、此業共々盛大となり、有名なる製造品となれり、

大阪府史談終

明治廿七年四月十九日訂正再版印刷
同 年四月廿四日訂正再版發行

正價金十二錢

編輯者

鈴木直三郎

同

橋本光秋

發行者

石井鈎三郎

大阪市東區備後町四丁目八十五番屋敷

大阪市南區心齋橋筋壹丁目六十五番屋敷

發行兼
印刷者

松村九兵衛

版權所看

